



「未来を切り開く力を育む」

校長 小高 敏男

45日間の夏休みが終わり、子供たちが学校に戻ってきました。子供たちの元気な声と輝く笑顔を見て安心するとともに、いつまでも子供たちが生き生きと生活し、自分の可能性を伸ばし成長していったほしいと切に願う気持ちになります。それも、この夏の各地を襲った大雨や地震災害、ネパールの土石流など、地球規模で起こっている自然災害で多くの人の命が奪われ、多くの方々が被災して困難な生活が続いていることを考えるからです。

こうした状況の中でも、被災していない私たちの生活にはあまり変化はありません。気温の上昇や線状降水帯での大雨などのニュースを聞いて「大変だな」と思うことはあっても、自分に何ができるかとなると被災地への支援程度で、この危機的状況を改善する行動を起こしている人は少ないのではないのでしょうか。私自身がしていることも節電やリサイクルなど無駄をなくす程度のことで、この危機的状況が改善することになっているとは到底思えません。また、そんな自然の危機的状況でも、世界では戦争が続き人間の愚かさを嘆くばかりです。

私たち大人は、子供たちに明るい未来を残していく義務があります。しかし、子供たちが担う将来は、大きく変化していきます。飽食の時代と言われて久しく、子供たちの生活も何もせずともおいしい食事、清潔な衣服、様々な日用品がそろえられた生活です。それに伴い、無気力な子供、指示待ちの子供、ニートなどの社会現象とも言える子供や若者の問題も起こってきました。また、オックスフォード大学のオズボーン氏がフライ研究員とともに著した『雇用の未来ーコンピュータ化によって仕事は失われるのか』という論文が世界中で話題となったように、AIによって現在の仕事は90%の確率で機械化され「消える職業・無くなる仕事」が多くなることが現実になっています。識別能力の技術も進み、タクシー等の自動車の運転も自動化され運転手の仕事が失われます。

このような自然災害や変化する社会に直面する子供たちの現状と未来を考えたときに、学校教育の役割は何かと言えば、予測困難な社会を切り開いていく主体的な力と協働的な力を子供たちに育むことです。主体的に協働して未来を切り開いていく力の育成が、学校教育で重要なことだとわかります。

大泉小の学校経営方針の柱には、「主体的に学び合う子の育成」を掲げています。主体性には、「気付き」という要素が重要です。気付いたからこそ言動に移せるのです。「気付き」が源と言っても良いかもしれません。「主体的に学び合う子の育成」の第一歩として「気付く力を伸ばしてほしい」という思いから、始業式で『炭鉱のカナリア』という話をしました。話の内容は、「炭鉱では、山を掘って石炭や鉱物資源を採取しますが、トンネル内ではしばしばメタンガスや一酸化炭素などの窒息ガスや毒ガスが発生します。昔の炭鉱夫達は、そのガスを早期に見察するために籠にカナリアを入れて坑道に入っていました。カナリアは、常にさえずっていることと人間よりも弱い生き物であるために、ガス等の異常が発生すると、先駆けて泣き止んだりばたついたりといった行動で警報の役目をします。カナリアには、人間よりも危険に気付く力があるのです。」といったものです。

私たち教員や大人は、子供たちにとっての「炭鉱のカナリア」にならなければならないのかもしれませんが、気付くだけでなく、気付いたことを我々大人が協働して解決の行動に移している姿を子供たちに見せることが大切です。新たな行動だけでなく、先日のラジオ体操のように、多くの保護者の方も参加されて子供たちのために協力する日常的な姿も大切です。二学期に行われる大泉スポーツフェスティバルでは毎年多くの方々が準備から片付けまでご協力いただいています。こうした保護者の方々の姿は、子供たちに協働の力を育む価値ある姿です。当たり前のことと思う方もいるかもしれませんが、他校ではPTAの活動を委託業者に依頼することが話題になる現状です。保護者の方々や我々教職員が手を携えて子供たちのために協力していく姿でなければ、子供たちの心に刻まれることはありません。

これからも大泉小の教育活動にご理解いただき、子供たちのためにご協力をお願いいたします。